

秀賞

今の私、未来の私を信じて

秋田県大館市立北陽中学校

3年 成田 優月

私には夢がある。困難で、どんなに道が険しいとしても、果たしたい夢が。鳥が空を飛んだり、魚が水中を泳いだりするように、人は誰でも自由に歩き回ることを当然のことと思っている。私はよく、「それくらいは普通できるよね」「あの人は普通じゃないから仕方ないよ」などという言葉聞く。

私はこのような言葉に出会うたびに思う。「普通」って、一体何なのだろう。「普通」は、本当に普通なのだろうか。そもそも、その「普通」は誰が決めたのだろう。この世の中には、どんなに必死に願っても、そのいわゆる「普通」のことができない人もたくさんいるのだから。

私には年の離れた弟がいる。大切な弟、でも……。弟とすれ違う時、多くの人がそれまでとは全く違った表情を見せる。少し驚いた表情を見せる人、気の毒そうに同情の表情を見せる人。さらには、まるで避けるようなしぐさを見せる人も。何事もないかのように平然として通り過ぎる人は少ない。それは、私の弟が寝たきりで呼吸器を付けている障害者だからである。しかし、このようなことが起きるたびに私は、まだ社会の中での障害がある人に対しての理解が、あまり広がっていないのだと感じる。

昨年、弟は小学1年生になり、支援学校に入学した。支援学校での生活はこれまでとは大きく違うため、慣れないことも多く、体調を崩しやすいという問題を抱えている。そのため、通学の回数そのものは月に1・2回と少ないのだが、訪問学習という形でたくさんの刺激を受けているようだ。できることは限られているが、それでもさまざまな体験をさせてもらっていることに、感謝の気持ちがいっぱい、本当にありがたいことだと思っている。

先日、支援学校で行われた夏祭りに弟と一緒に出かけた。これまで弟と一緒に行動するときにはさまざまな人の目がどうしても気になっていた。正直、嫌な思いをすることもたびたびあったため、少し周りを気にしすぎて余計な心配をするようになっていたのかもしれない。これまで弟の学校での様子を目にする機会があまりなかったこともあり、この日も、周りの生徒や人から特別な反応をされてしまうかもしれないという、いつもの不安が頭をよぎった。しかし、そんな心配した光景は全く見られなかった。みんなは弟に自然に話しかけたり、

手を握ったり、車いすの横に並んで歩いたり、笑顔で接してくれたのだ。みんなが少しも嫌がらずに、弟のこゝを受け入れてくれて、とても嬉しかった。弟はここで気兼ねなく学校生活を送ることができている。その事実、嬉しさと喜びで胸がいっぱいになった。

弟はしゃべったり歩いたり、思うように動くことができない中、それでも仲間を見つけ、頑張っている。私は弟のために何かできることはないかと、ずっと強く思い続けている。

弟が病気になった原因は分かっていない。しかも、今の技術では治すことができないと医師から告げられている。この事実、直面したときから、私の心の中に一つの決意が生まれた。「私は外科医になる。そしていつか、自分の手で弟の病気を治す。」この道が険しいということは、もちろん分かっていて。でも私のこの思いは、決して変わることはないだろう。

今現在、私はまだまだ日々の生活に精いっぱいだが、その夢を実現するために何をすべきなのかをよく考えるようになった。まずは、外科医になるための学力を身に付けるということ。そして、さまざまな体験や経験の中で命の大切さを学ぶこと。この二つが、今の私がすべき最大のことであると思う。そのために、どんな学習や活動に対しても、全力で取り組んでいきたい。

10年後、20年後に、私は夢をかなえることができているのだろうか。障害や病気で苦しんでいる人たちを、一人でも多く笑顔にすることができるのだろうか。また、社会の中で「障害者は普通ではない」という偏見がなくなり、少しは障害者に対する理解も広がっているのだろうか。障害者と健常者が共に笑顔で過ごせる社会になっているのだろうか。不安はあるが、10年後、20年後の私が「うん、かなってるよ」と言える未来であってほしいと思う。そのために、私はどんな困難にも立ち向かい、挑み続けたい。

今の私、未来の私を信じて。